

優勝ラケット 44年の縁

今年9月から44年ぶりに和歌山で開かれる「紀の国わかやま国体」で記念展示されることになった。

1971年の和歌山国体（黒潮国体）で軟式庭球（ソフトテニス）一般男子（当時）の愛媛チームは初めての優勝を飾った。その時勝利を決めたラケットが、縁あつ

71年和歌山国体・軟式庭球 砂田さん（松山）

ラケットの持ち主だったの第1ペアは敗れたが第2ペアは松山市北条辻の砂田隆司さん（67）＝今治カントリー倶楽部支配人。黒潮国体には3ペアのうち最終ペアの一人として出場していた。当時、選手は公民館や一般家庭に宿泊しており、砂田さんも会場のあった和歌山県かつらぎ町の家庭にお世話になっていた。愛媛はダークホース的存在だったが勢いで勝ち上がり、決勝で地元・和歌山と対戦。



砂田さんがサインして宿泊先の家庭に贈ったラケット（提供写真）

応援の礼 贈った宿泊先保管

を果たし「念願の日本一」になった。テニスは「やめよう」と決意。手厚いもてなしや応援へのお礼の気持ちも込めて、カバーにサインしたラケットを宿泊先の家族にプレゼントした。

そのラケットを、贈られた家族は大切に保管していた。現在の持ち主、和歌山県橋本市の教員太田敦久さん（50）は当時6歳。「祖父にねだってラケットをもらった」と記憶している。以来、手放すことなく、常に手元に置いていたという。太田さんは「自分はテニスはしなかったが、国体優勝のラケットは小さな宝物だった」と話す。

両県のソフトテニス関係者の交流から、ラケットが保管されていることが分かったのは7～8年前。砂田さんは「まさか持っていてくれていたとは思っていなかった。感激の一言。スポーツには勝った負けた以上に大切なものがある」と感慨深げ。2017年



⑤1971年の和歌山国体で初優勝し、表彰される軟式庭球一般男子の愛媛県選手団。最前列左から2人目が砂田隆司さん⑥44年前のラケットにまつわる思い出を語る砂田さん＝5月下旬、今治市

今秋「わかやま国体」展示へ

ソフトテニス会場の和歌山県白浜町テニスコートで展示される。砂田さんは会場を訪れるとともに、当時の宿泊先の

（多田良介）